

第44回 作文・図画岩手県コンクール作品集



ごはん お米とわたし



 JA岩手県中央会



さあ、みんなで取り組んでいこう。
やっぱり国産農畜産物推進運動
～みんなのよい食プロジェクト～

発行／令和2年1月29日 企画・編集・発行／JA岩手県中央会 印刷・製本／川嶋印刷株式会社

目次

◆ごあいさつ.....	1
JA岩手県中央会 代表理事会長 久保 憲雄	
◆図画部門入賞作品.....	2
◆作文部門入賞作品.....	9
◆総評.....	16
審査委員長／元岩手県教育委員会教育委員長 八重樫 勝	
◆図画部門を審査して.....	16
盛岡市立下橋中学校 指導教諭 佐々木 俊江	
◆作文部門を審査して.....	17
盛岡市教育委員会学校教育課 指導主事 山下 るり子	
◆コンクール入賞一覧.....	18
◆コンクール概要.....	22

図画・作文各部門

1 部：小学校 1 ～ 3 年

2 部：小学校 4 ～ 6 年

3 部：中学校 1 ～ 3 年



いゐわの

JA岩手県中央会

代表理事会長

久保 憲雄

第44回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、作品をご応募いただきましたみなさまにお礼を申し上げますとともに、入選された方々には心からのお祝いを申し上げます。

このコンクールは、子どもたちに、お米やごはん食がどのように作られ食卓に並んでいるのか、そして、稲作が地域において、どんな役割を果たしているかなどを知っていただくことを目的として、昭和51年から実施いたしております。

44回目を迎えた今回も、県内各地から作文78点、図画198点もの力作が寄せられました。この中から全国コンクールにおいて、作文部門1点が優秀賞、図画部門2点が優秀賞に選ばれました。本当におめでとうございます。

みなさまから寄せられた作品を拝見いたしますと、家族で食事を作る様子、またごはんをおいしそうに食べる姿や、米作り・稲作体験を通じた苦労や楽しみ、そして毎日の食事に対する家族や生産者への感謝など、日頃の体験や出来事を生き生きと的確にとらえており、素直な感性にあふれていました。

次代を担う子どもたちの意識の高さに、あらためて目を見張るとと

もに、日本農業の将来や、ごはん食を中心とした日本型食生活の継承に、大きな期待を抱くことができました。

JAグループでは、日本の「食」とは何かを考え、その「食」を生み出している日本の農業を好きになっていただくという取組みを全国的に進めております。「食」の未来をつくることは、日本の未来をつくることにつながります。その中心となるのが、古くから日本人の食卓に並び、親しまれ、日本の食文化を築いてきたお米です。

このコンクールをきっかけに、家族で食卓を囲むことの幸せを感じたり、お米を作る農家の思いを知り、自分たちが暮らす地域農業について考えたことは、とても貴重な経験となったのではないのでしょうか。自然や家族、友人を大切にする気持ちや、地域の人たちへの感謝、伝統ある食文化への敬意、そして、心を込めて育てられたお米のおいしさや農業のすばらしさ、岩手の大地に対する感謝の気持ちを忘れずにいてください。

最後に、今回ご応募いただいた学校の先生方をはじめ、関係するみなさま方のご支援とご協力に感謝を申しあげ、ごあいさつとさせていただきます。

図画部門
3部

ぜんこくゆうしゅうしょう
全国優秀賞 (全国コンクール)

いわてけんきょういくちょうしょう
岩手県教育長賞

「母の笑顔とちらし寿司」

おい かわ う らら
及 川 小 春

いちのせき しりつおきた ちゅうがっこう おん
一関市立興田中学校 2年



図画部門
1部

ぜんこくゆうしゅうしょう
全国優秀賞 (全国コンクール)

いわてけんちじしょう
岩手県知事賞

「お米を流さないように…はじめてのお米とぎ」

ち ば こ はる
千 葉 心 遙

いちのせき しりつたきざわしょうがっこう おん
一関市立滝沢小学校 3年



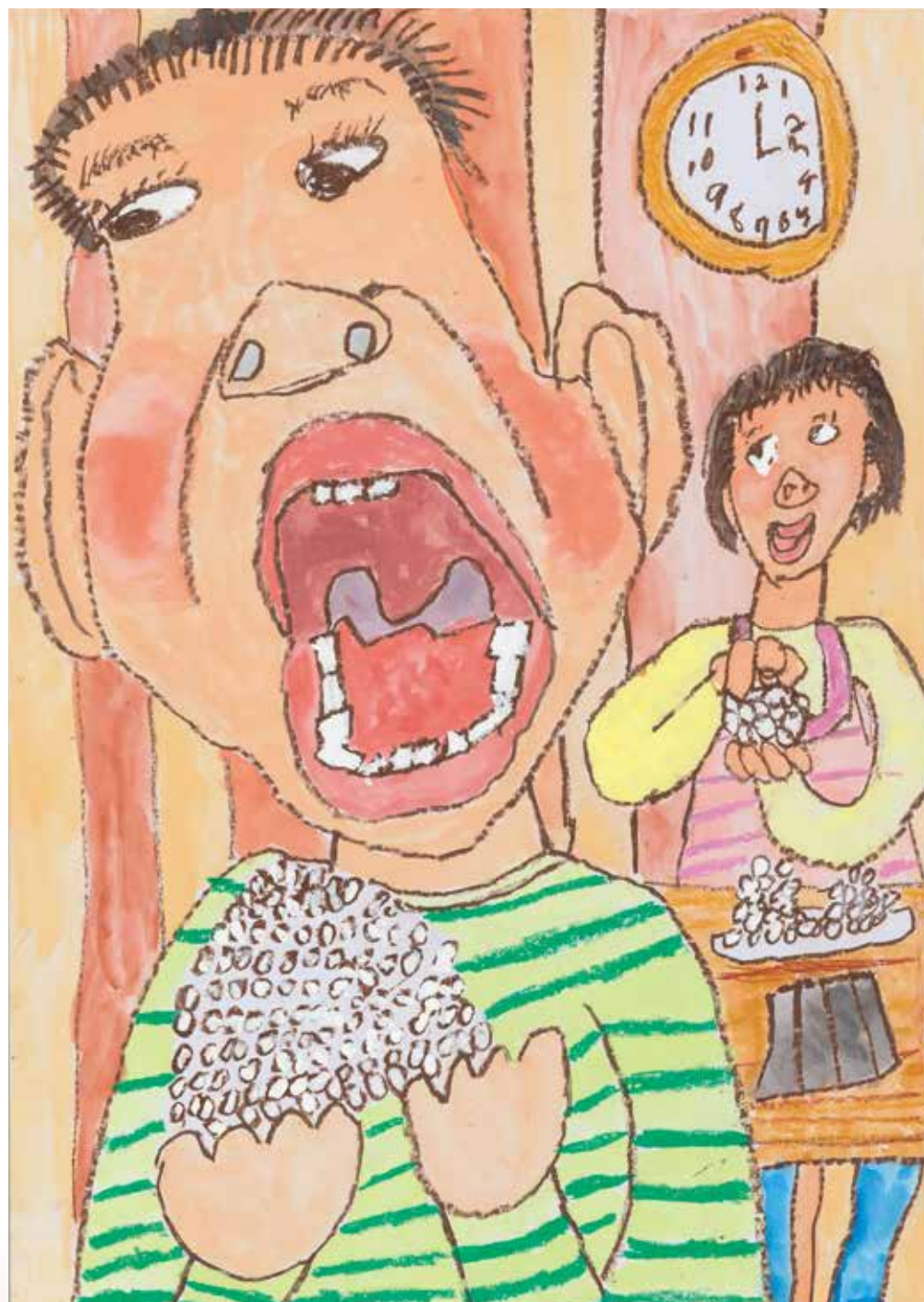
図画部門
1部

いっばんしゃだんほうじんいえ ひかりきょうかい
一般社団法人家の光協会
ほっかいどうとうほくふ きゅうぶん か きょくちようしょう
北海道東北普及文化局長賞

「3時のおやつ」

まつもとしょうい
松本匠生

くのへそんりつえさしかしょうがっこう ねん
九戸村立江刺家小学校 2年



図画部門
3部

じえいえいいわ て けん ご れん か いちようしょう
JA岩手県五連会長賞

「バケツ稲の観察」

さとうみずみ
佐藤瑞実

いちのせきしりつおきたちゅうがっこう ねん
一関市立興田中学校 2年



図画部門
3部

ゆうしゅうしょう
優秀賞

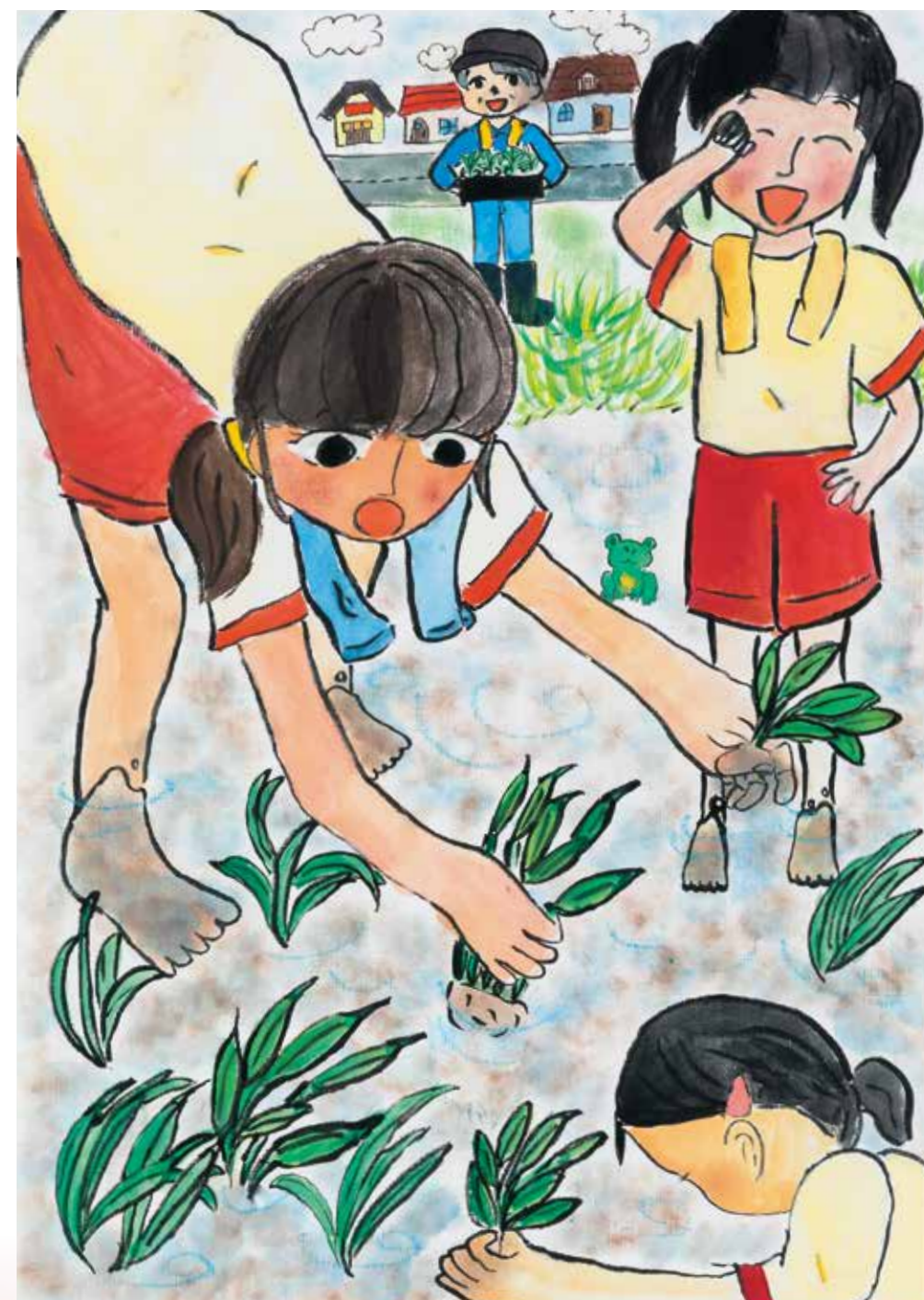
「愛情こめて」
さ とう ひ な こ
佐 藤 日菜子
もりおか しりつみるまえちゅうがっこう ねん
盛岡市立見前中学校 2年



図画部門
2部

かぶしきがいしゃ に ほんのうぎょうしんぶんとうほく し しょうしょう
株式会社日本農業新聞東北支所長賞

「米づくりって大変だ！」
な つ い に こ
夏 井 二 湖
きたかみ しりつえづりこしょうがっこう ねん
北上市立江釣子小学校 5年



作文部門
1部

ぜんこくゆうしゅうしょう
全国優秀賞 (全国コンクール)
いわてけんちじしょう
岩手県知事賞

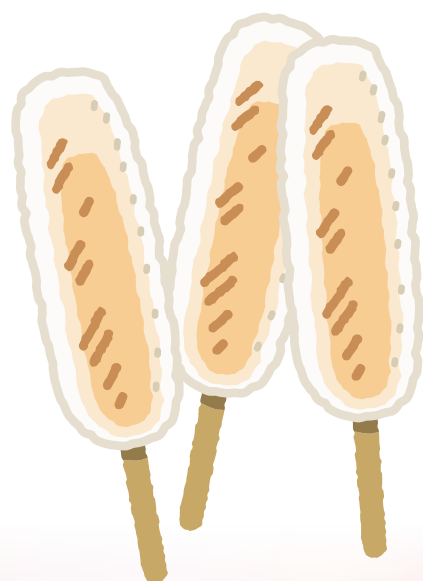
「おいわいのきりたんぽ」

ひら いわ ゆう しん
平 岩 優 心

し わ ちやうりつ あかいししょうがっこう おん
紫波町立赤石小学校 3年



「きようは、きりたんぽを作るよ。」
おばあちゃんのはりきった声が聞こえます。
「やったあ。ほくとお父さんは、すみおこしだね。」
毎年新米ができると、ほくの家では、きりたんぽ作りをします。ほくとお父さんは、すみおこしをして、きりたんぽをやくじゅんびをします。おばあちゃんは、新米をたいて、たきあがったごはんをつぶして、ぼうにつけたり、くるみをすってあまみそを作ったりします。おばあちゃんの作ったきりたんぽを、みんなでやいて、その上にみそをつけて食べます。今年のみそは、あまくてくるみの味もしっかりしておいしかったので、ほくは、三本食べました。きりたんぽをやっていると、やきもちのにおいがして、十一月なのにお正月気分になります。
おじいちゃんは、トラクターで田んぼをたがやしたり、なえ作りや田うえをしたり、夕方に田んぼを見回ったりして大切にお米を育てています。くろうして育てたお米を、おいしいきりたんぽにして食べることで、ほくのお家では、おいわいをしています。どうしてほくの家できりたんぽを作るのか、おばあちゃんに聞いてみたことがあります。おじいちゃんが秋田の出身で、新しいお米ができると、きりたんぽでおいわいしていたそうです。どこのお家でもやっていると思っていたので、他の家では、あまり作らないと聞いて、とてもおどろきました。



おじいちゃんは、
「よく食ってるな。そんなにうまいか。」
と言って、にこにこしています。
「来年もがんばって作るぞ。」
と言っているようです。ほくも、もみまきや田うえの手つだいをして、おいしいきりたんぽを食べたいと思います。もうすぐ、今年の新米が実ります。

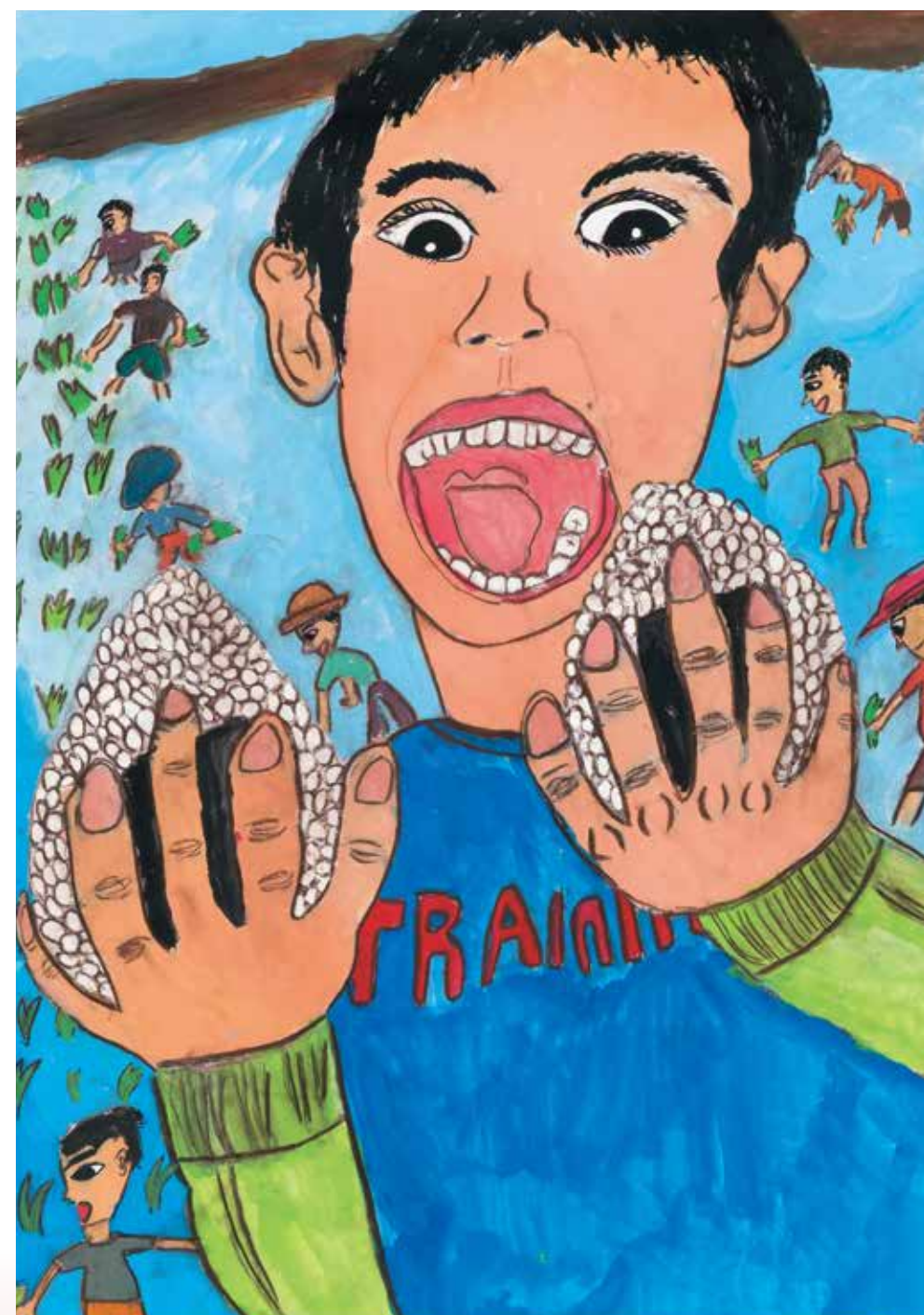
図画部門
1部

ゆうしゅうしょう
優秀賞

「がんばったあとのおにぎり、最高！」

かわ むら ひ ろ
河 村 陽 和

くのへ さんりつ えさしかしょうがっこう おん
九戸村立江刺家小学校 3年



「い手の田んぼのお手伝い」

きく ち み お
菊 池 美 桜

おうしゅう しりつ きざいく しょうがっこう おん
奥州市立木細工小学校 5年



「きれいに植えたね。」
田んぼが太陽で照らされている。わたしはジジとババといっしょに、い手のジジの家に行った。今日は田植え。こえちらしや代かきはい手のジジがやってくれていた。たて五十メートル位ある田んぼを一人でやったそうだ。すごいなあ。
十時になり、田植えが始まった。もくもくと、なえを田んぼに植えていく。
「うん。きれいに植えられている。」
後ろを確にんしながら、わたしは田植えを続けた。と中で、わたしはどろに足を取られた。ブチヨッ。バランスをくずしたわたしは、顔から田んぼに飛びこんだ。
「だいじょうぶかあ。」
みんな笑いながら言った。わたしの顔は、どろだらけ。ババが助けに来てくれた。顔だけふいて、また田植えを始めた。
「終わったあ。」
あっという間に時間がすぎ、田植えが終わった。わたしは、田んぼから上がって、全体を見わたした。どろで茶色だった田んぼは、なえで緑一色になっていた。
「きれいに植えられてよかった。」
わたしは田植えの出来ばえに満足していた。
「おつかれ様。ご飯食べよ。」
「うん。」

わたしは、笑顔で答えた。いつの間にか、おながが空いていた。わたしはよれた服を着がえて、お昼作りのお手伝いをした。去年作ったお米をたいていたようだ。わたしはご飯をお茶わんにもって、運んだ。
「いただきます。」
お米は、ほのかにあまく感じた。
「これなに。」
「きなこ味のおはぎだよ。」
ババが答えた。おはぎも去年のお米で作ったそうだ。一つ食べてみると、あまくてもちもちしていた。
「おいしい。」
そう言いながら、自然と笑顔になった。ご飯を食べると、つかれていた体が一気に元気になった。
「いっぱいあるから食べろ。」
おながが空いていたからか、いつもはしないおかわりもした。
「ごちそうさまでした。」
自分達で作ったお米は、特別おいしく感じた。
「秋にまた来いよ。」
い手のジジがニコニコしながら言った。
「分かった。バイバイ。」
わたしもニコニコしながら返事をして、家に帰った。
たくさん実るように植えたなえ。大きく育って、秋に、おいしいお米をしゅうかくするのが楽しみだ。六年生になっても中学生になっても、お米作りの手伝いを続けたい。

「大地からの贈り物」

なか し ま あゆみ
中 寫 歩

いちのへちようりつ おく なかやまちゅうがっこう おん
一戸町立奥中山中学校 2年



大きな水面に映る緑鮮やかな木々と、白い雲浮かぶ真っ青な空。絵葉書のような美しい日本の風景は、お米と深い関係があります。
雨や雪は山の地面にしみ込み、土の栄養をたつぷり含んでから川へと流れ、その栄養分いっぱいのお水を田んぼに引き込む事で疲れた田んぼの土は、よみがえります。同じ地で連作ができる唯一の穀物だと言えます。
稲も麦も酸性の土壌にはとても弱く、毎年同じ水田で長い間連作できるのは、きれいで安全な水があつてこそ。長く休耕した田んぼを再び戻すには、想像できない程大変な労力と時間が掛かるでしょう。生産調整は大切な事だと思いますが、減反政策がもたらす問題点はないのでしょうか。母方の祖母の家は減反政策の際、田んぼは雑穀畑へと姿を変え今は、他の農家の方が牧草をまいて管理しています。もう田んぼには戻せません。
「平成米騒動」と名付けられた平成五年の記録的冷夏を私は知りません。全国で五百以上の銘柄があるにもかかわらず、どの県でもお米が取れず、タイ米、カリフォルニア米に主食を助けて頂いたと母に教えてもらいました。大きな米農家さんへ泥棒が相次いだそうです。今の私には、レストランや給食で外国のお米が出される事を想像することができません。
縁起がよいとされ、節分に並ぶ食材鮮やかな恵方巻。残ったものは食品ロスとして廃棄されてしまいます。「米騒動」を体験しているのに大切に育てられ、出荷されたおいしいお米が捨てられる。悲しみがこみあげます。
予約制にする、家庭で食べられる分だけを作る、あるいはこども食堂や残業の多い会社で食してもらい捨てない未来になったら良いな。と強く思います。実は、給食でいただけるご飯の量が少し多く、食べるのに時間が掛かる私は完食がとてむずかしい毎日です。食べられる量だけよそえたらお米に対しても農家の方々に対しても失礼ではないの

に。と心で思っています。「残してごめんなさい。」ご飯給食の際いつも感じる罪悪感です。お米の大切さを忘れてはいけないと思います。
私が物心ついた頃には、すっかり腰が曲がっていた祖母。少し高い所に育ったきゅうりやトマトの収穫は大変そうでした。祖母は私や亡くなった祖父の為にメロンやスイカも毎年大切に育ててくれています。以前は、その場で力を込めて引きぬいた人参を冷たい井戸水で洗って食べていた野生児だった私。「宝の山だね。」と言っていたのに小学校高学年頃から祖母の畑へ手伝いに行っていないのがとても悔やまれます。
担い手さえいれば、ずっと田んぼもやっていたでしょう。畑の規模も広いまま、ところせましと色とりどりの野菜があつたと思います。
農家の皆さんを取りまく今の環境はとても厳しいといえるでしょう。
「つや」「味」「かおり」「粘り」「かたさ」の五つで「おいしいお米」は決まるのだそうです。もちろんご飯を炊いた人が込めた愛情もあると思います。一粒に五つものおいしさがぎゅっと詰まっている食材は、お米だけだと言えます。
田んぼの稲は、猛暑に耐え、豪雨に負けず真っ直ぐにぐんぐん伸び、ずっしりと重そうに垂れています。黄金色に色付くまでもう少しです。この忍耐力だけにでも特Aをつけてあげたい気持ちでいっぱいです。「色とりどりの安心と安全をご馳走様でした。」と手を合わせる。稲作や農業にたずさわるすべての人に感謝を込めて、そして大地が与えてくれる自然に敬意の心をいつまでも持ち続けたいと思っています。
絵葉書のような風景が来年も見られますように。

作文部門
2部

かぶしきがいしゃ に ほんのうぎようしんぶんとうほく し しょうしょう
株式会社日本農業新聞東北支所長賞

「つなげていきたい米作り」

きく ち まい
菊 池 苺

おうしゅう しりつ きざい く しょうがっこう おん
奥州市立木細工小学校 5年



「みんなでがんばりましょう。」
わたしの学校は、近くの田んぼで米作りの体験学習をしている。今日は、田植え。田んぼは、学校から近い。学校のみんなで田んぼに歩いて向かった。田んぼに向かうと、地いきの方々がたくさん待っていた。田んぼのどろには、細い線が何本も入っている。
「上手にできるかな。」
わたしはワクワクしていた。
「よろしくお願いします。」
みんなで声を合わせた。わたしはサンダルをぬいで、田んぼにそうつと入った。
「冷たい。」
どろは、ひやつとしていて、やわらかくて、ベタベタしていた。わたしは、なえを持って植え始めた。細い線の所に三本ずつなえを取って植えていく。なえとなえの間が少し空くように気をつけて植えた。となりで作業をしていた美子さんが、
「上手だね。」
と、ほめてくれた。わたしは、うれしくなって、どんどん進んでいった。兄の望夢くんは、もうそろそろで終わる。早いなあ。わたしも、きれいに早く植えようとがんばった。気分くと、持っているなえがなくなった。わたしは、美子さんからなえをもらい、また、進みだした。後ろでは、美子さんやユリ子さんがきれいに手直ししてくれた。
「つかれたなあ。」

わたしは、立ち止まって、周りを見わたした。少しはなれた所で、妹のゆいが植えているすがたが目に入ってきた。ゆいは今年入学した一年生。学校でする田植えも初めてだ。わたしは、ゆいが上手にできるか心配だった。でも、ゆいは、自分の持ち場をゆつくりと、ていねいに植えていた。少し線よりはみ出したなえもあるけど、真けんに、がんばって植えているのが分かる。わたしは自分の所を植え終えた後、ゆいの所に行った。
「がんばって。」
と、わたしは、ゆいに声をかけた。ゆいは、
「うん。がんばる。」
と言って、また作業を続けた。わたしも、ゆいの所を手伝った。ゆいの体そう着は、どろだらけ。がんばってここまで植えたんだ。わたしは、うれしかった。わたしがやってきた米作りが、ゆいに伝わっていくのだと思った。
ゆいの所も終わり、田んぼを見わたした。太陽が出ていて、田んぼはラメみたいにキラキラ光って見えた。ゆいも、田植えの出来ばえによるこんでいる。
「田植え楽しかった。」
わたしは、ゆいに聞いてみた。
「うん。楽しかった。」
ゆいは、うなずいた。
これからも、ゆいや、来年入学する妹のさらに、米作りをつなげていきたい。

作文部門
3部

いっばんしゃだんほうじんい え ひかりきょうかい
一般社団法人家の光協会
ほっかいどうとうほく ふ きゅうぶん か きょくしょうしょう
北海道東北普及文化局長賞

「祖父と米作り」

さ さ き りょう すけ
佐々木 亮 輔

みやこ しりつ つが りいしちゅうがっこう おん
宮古市立津軽石中学校 1年



私の祖父は、おいしいお米を作っていました。その祖父の手伝いを私もしていました。
春になると田おこしをして、伸びた草を耕します。その次に種まきをします。家で種をまき、芽出し機で温度管理をしました。種をまいて土を入れた箱は水がたつぷり入っていて重かったです。重たいのでひっくり返さないように注意しました。植えた種が大きく育つように願いながらやりました。
三週間くらい経つと苗は十センチメートルくらいまで育ち、田植えをします。育った苗を田植え機に補充する時に手渡しするのを手伝いました。田植え機で植える事ができなかった所には、手作業で苗を植えていきます。田植えをした後、田んぼの水加減を調整します。
祖父は朝早く起きて田んぼの水の管理を行い、苗が育つように働いていました。おいしいお米を作るために、暑い夏でも草刈りを汗びっしょりになりながら一生懸命していました。田んぼの周りが雑草でおおわれると苗を食べる害虫がよってくるからです。
八月の初め頃になると穂が出て花が咲き、約一週間くらいで散ってしまいます。花が散ったら水を抜きます。約一か月経つと実が大きくなります。大きく育っているのを祖父は嬉しそうに見ていました。
十月の初めに稲刈りをします。コンバインを使ってもみとわらを分けて、もみはコンバインのタンクの中に入れてわらは、細く切つて田んぼにまきます。タンクがいっぱいになって軽トラにもみを移して家にもってきて乾燥機にもみを入れるのを、手伝いました。
こびりの時間になると、わらの束の上に座って家族みんなでひと息入れます。
「今年の実り具合はどうか。」
「今年は、いっぱい実ったようだな。」
「亮輔も手伝ってくれたから、腹一杯食っていいぞ。」

「もう食べれないよ。」
困った僕を見て、みんなが笑っています。僕も笑い米作りは家族の絆でもあると僕は思います。
米を作るのは、本当に大変です。しかし、一年間の苦勞がつまった新米は、甘くてふっくらしているものすごくおいしいのです。
ところが、祖父は米作りを辞めました。一年前の事です。「おれは、もう年だから無理だな。」
と祖父はさびしそうに言いました。
今は、父も母も仕事をしているので、毎日米作りをすることはできません。何十年が続いてきた私の家の米作りは、終わってしまいました。それでも祖父は
「田んぼを荒れた状態にしておきたくない。」
と言って、トラクターで田を耕しています。夜中に雨が降った時、祖父は慌てて起きて、田んぼに行こうとしました。田んぼの水を抜いて調整しようとしたのでした。
「もう、田んぼには苗はなかったんだ。」
と言いました。私はそういう祖父を見て切なくなっていました。
米作りは本当に大変です。私は祖父の手伝いをしてみて、休んでいる時間がないほど一年中働くほど忙しいことが分かりました。ご飯の一粒を作るのに、一言で言い表わせなほどの多くの苦勞があります。一生懸命育てても、津波や自然現象であつてなく米が台無しになってしまうこともあります。そういう苦勞が実って私達はおいしい米を口にすることができなのです。
日本の米作りの後継者についてもよく話題になります。私は将来米作りをするかどうか分かりません。しかし、祖父のように大切に米を育ててくれている人達の苦勞は、覚えておきたいです。米を口にする度に、感謝をして食べたと思います。

「ご飯と家族の食卓」

くま がい たい し
熊 谷 太 志

いちのせき し りつ はな けい ちゅう がっこう ねん
一関市立花泉中学校 2年



僕の家族は、みんなお米が大好きだ。食卓にご飯がないと食べた気がしない。ほっかほかのご飯を食べると、体が暖まり心が和むような感じがする。このように、お米は、空腹を満たすだけでなく、僕たちの心をも満たしていると分かる。お米は僕たちにとっての大切な役割を担っているのだ。

幼い頃から数えきれないくらいたくさん美味しいご飯を食べてきたが、その中でもとても印象に残っているご飯がある。それは、僕のおばあちゃんがつくってくれる炊きこみご飯だ。毎年、年末におばあちゃんの家に行くのだが、十二月三十一日は、家では、必ずおばあちゃんをつくってくれる炊きこみご飯を食べる年越しをするきまりがあり、そこで食べる炊きこみご飯は、とにかく絶品だ。僕は、炊きこみご飯をつくるおばあちゃんをみると手伝いたくなるが、おばあちゃんは、

「二人でつくるのが、私のやり方なの。」

と、いつも言う。

おばあちゃんがつくる炊きこみご飯で欠かせないのは、食材だ。どんな料理をつくる時も最初にしなければいけないことは、食材をそろえることだ。おばあちゃんのつくる炊きこみご飯の具はいつもきまっている。ホタテの貝柱にタケノコ、にんじん、しいたけのこの四種の食材だ。まずは、買い出しに行く。買い出しについていくとおばあちゃんはずいぶん言う。買い出しを始める。

「今日は、みんなが来たからいつもよりはりきるぞ。」

しかし、おばあちゃんのこだわりで、いつもよりいい物を買うという一心で、買い出しは、一軒では終わらない。二軒、三軒と次々にはしごして行く。買い出しだけでかなりの疲労だがおばあちゃんは、まったく疲れをみせず、次々と準備をすすめていく。いつものようにお米と水で炊くようにして、そこに具材を入れていく。そして最後に味付けだ。味付けは、しょうゆ、みりん、料理酒、砂糖などを入

れて炊く。みんなでおいしく炊けますようにと願いをこめる。後は、待つだけ。準備だけで、とてつもない空腹で倒れそうだった。さらに、炊飯器からくる炊きこみご飯のいい匂いがさらに空腹をひどくさせる。そのとき、ピーと炊飯器から炊けた音が聞こえた。その時は、とにかく急いで炊飯器に走っていった。フタをあけると、とてもおいしい匂いが鼻から入り、全身にいきわたった。僕は、ただただ食べたいたいっしんでしゃもじをとり炊きこみご飯を茶碗によそって一口目を食べた。なんとおいしいことだろう。そこからは、もう無我夢中で食べ続けた。二口目、三口目、もう、はしの勢いは、止まらなかった。兄弟が食べ始めてからは、もう競争のようだった。二杯目、三杯目、どんどん食べ続け、気づいた時には五杯も食べていた。みんなと食卓を囲み楽しく会話をしながら炊き込みご飯は、とてもおいしかったし、みんなの美味しいご飯を囲む食卓は、僕たち家族にとって楽しい思い出になったものだった。

僕たちは、「おいしいご飯を家族で囲む」ということに対して考えなおす時期がきている。なぜ、ここまで手づくりの料理をつくるのか。買った方が早いのではないか。でも、今の僕には、分かる。食事は、ただ食べればいいというものではない。家族で食卓を囲んで話し、誰かが家族のために心をこめてつくった「ご飯」が一番なのだ。これからも家族で楽しい食卓を囲む時間を大切にしていきたい。

「おにぎりやさんになりたいな」

きく ち ゆ か り
菊 池 由佳莉

おうしゅう し りつ き ざい く しょう がっこう ねん
奥州市立木細工小学校 2年



「おにぎりつくろう。」

わたしは、夕ごはんのあと、あまったごはんを見て、おかあさんにおねがいしました。わたしは、おにぎり好きなので、自分でつくって食べたくなりました。

「いいよ」

おかあさんが、ニッコリしました。

はじめに、ボールに入れたごはんは、わかめのふりかけをかけて、へらでまぜました。まぜるときは、ごはんがいっぱいだったので、力を入れてまぜました。わかめと、ごはんのにおいがしました。わかめの色が広がって、ごはんがすこし、みどり色になりました。つぎに、あついまぜごはんをへらでとって、おにぎりをにぎりしました。ごはんが手につかないように、手をすこしぬらして、りょう手ですっぽりとつまみました。手の中でごはんをやさしくまわすと、手ざわりは、ムニムニ。気持ちいい。

「たのしいなあ。プップツツて空気の音がするよ。」

おかあさんにささやくと、おかあさんは、

「そう。よかった。」

と、ニッコリわらいました。できあがったおにぎりは、おとうさんとたべました。ごはんはほくほく。すこししょっぱくて、わかめのかおりがふわつとして、とてもおいしかったです。おとうさんも、

「うん、うまいっ。」

と、おいしそうにたべてくれました。

わたしは、おにぎりが大好き。大きくなったら、おにぎりやさんになりたいな。おいしいお米をふんわりたいて、中にさけや、ベーコン、こんぶをいれて、お客さんが、「おいしいね。中にいろいろ入っていて、すごいね。また、たべにくるからね。」

と、ほめてもらえるような、うちゅう一おいしいおにぎりを、つくりたいです。



総 評



審査委員長
元岩手県教育委員会
教育委員長
八重樫 勝

第四十四回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、今年も小・中学生の皆さんから、多くの作品が寄せられました。

楽しく、慎重に審査をしました。
どの作品も、お米やごはんの大切さや農業の大事さを中心に、体験したこと、考えたこと、感じたことなどを素直に表現していました。

家族が仲よく食事をしたり、働いたりしていること、祖父母の知恵を受け継いでいること、日本や世界の食糧事情のことなどについて、真剣に向き合い、作品作りをしている姿を感じ取ることができました。

最近の、想像を絶するような悲しい事件・事故が続いている中であって、小・中学生の皆さんの純粋な心に触れることができて、とても救われる思いがしました。

改めて、このコンクールの果たす役割の大きさについて深く考えられました。
〈作文の部〉

・ごはんやお米にまつわる「出来事」を「家族とのふれあい」を通して、素直な表現で書きまとめた作品が多かった。

・様子を表す語、時間や事柄の順序を表す語を適切に用いて、読み手によく伝わるように工夫していた。

・ごはんやお米に対する「思いや考え」を自分の体験を通して、文章の組み立てを工夫しながら書いた作品が多かった。

・色、形、音、温度、香りなどが伝わる五感を使った表現で、臨場感あふれる作品が増えてきた。

・「食や家族に対する感謝の念」「稲作文化や日本食への尊敬の念」等が、構成や表現の工夫によって効果的に書かれている。

・家族の在り方や自己の生き方について見つめ直していることが、作品から伝わってくる。

〈図画の部〉
・どの作品も完成度が高く、すばらしい作品ばかりであった。

・入賞した作品は、お米と自分との関わりを大切にし、親子での米とぎの様子や、田植えや稲刈りの様子など、絵を描く上で最も重要な絵の場面設定に工夫がある。

・小学校低学年の作品は、人物の表情が豊かで、のびのびと描いて様子がとてもよく伝わってきた。

・高学年は、水彩絵の具を使った表現が豊かになり、色遣いや画面構成に工夫が見られた。

・中学生は、描写力に優れ、細部にわたり丁寧に描いている作品が多かった。

・今回初めて特別支援学校からの応募があり、大変喜ばしいことである。

入賞の皆さん、ご家族の皆さん、指導に当たられた先生方、おめでとうございます。これからも自分の感性や言葉をみがき、友達も誘って、このコンクールに応募して下さい。

作文部門を審査して



盛岡市教育委員会
学校教育課 指導主事
山下 るり子

本文文コンクールに、今年度も多くの学校、児童生徒の皆さんが応募してくださいました。どの作品も、自分の生活と「ごはん・お米」との関わりについて、五感を通して感じたこと、考えたことをしっかりと綴っていることに嬉しさを感じます。

全国の優秀賞と岩手県知事賞を受賞した平岩優心さん（紫波町立赤石小学校三年）の「おいわいのきりたんぼ」は、「きりたんぼ」でお祝いをする家庭独自の食文化と祖父母に対する尊敬や感謝の気持ち、素直な表現でまとめられています。優心さんの温かい人柄が文章に表れた心に響く作品です。

岩手県教育長賞を受賞した中島歩さん（一戸町立奥中山中学校二年）の「大地からの贈り物」は、「自然の恵みに感謝を」という明確な主張が、多様な情報によって支えられており、その書きぶりには、歩さんの見方や考え方も表れています。読み手を引き込む論の展開は圧巻です。

JA岩手県五連会長賞を受賞した菊池美桜さん（奥州市立木細工小学校五年）の「い出のたんぼのお手伝い」は、色・形・音・温度・香りが伝わる五感を使った表現で生き生きと綴られた、臨場感に溢れる作品です。田植えを通して、地域の一員としての自覚を深めている美桜さんに頼もしさを感じます。

家の光協会北海道東北普及文化局長賞を受賞し

図画部門を審査して



盛岡市立下橋中学校
指導教諭
佐々木 俊江

図画部門では、今年度も県内各地からたくさんの方が応募されました。どれもお米やごはんが大好きという気持ちや家族や友達との触れ合いの大切さが伝わる作品で、鑑賞しながら心が温かくなりました。応募して下さったみなさんに感謝いたします。また、どの作品も素晴らしく、審査が大変難しかったです。その中でも入賞した作品は全国でも優秀賞に入るほどの秀作でした。

全国の優秀賞と岩手県知事賞を受賞した千葉心遙さん（一関市立滝沢小学校3年）の「お米を流さないように」は、初めてのお米とぎ」は、お米とぎを覚えようとする心遙さんと温かく見守るお母さんの表情やポーズなどが見る人の心を引きつける素晴らしい作品です。左右の手の動きもよく観察して描かれています。何より、お母さんにお米とぎを教えてもらい、見守ってもらった喜び体験があるからこそ、このような素晴らしい作品を描くことができたのだらうと思います。お米を通して親子の愛情を感じられる作品です。

全国の優秀賞と岩手県教育長賞を受賞した及川小春さん（一関市立興田中学校2年）の「母の笑顔とちらし寿司」は、おいしそうならし寿司と特別な日のごちそうを心を込めてつくるお母さんの優しい笑顔の描写が素晴らしい作品です。特に、腕や顔の肌色の混色に優れていて、質感や立体感をうまく表現しています。またお母さんが青色のエプロンを身に付けていることにより、赤みのあるちらし寿司がよりいっそう映えて、おいしそうに見えるなど、色遣いにも工夫が見られ

た佐々木亮輔さん（宮古市立津軽石中学校一年）の「祖父と米作り」は、しっかりとした表現と構成で綴られた作品に、一貫して祖父に対する尊敬と感謝の念が表れていることに心打たれます。

日本農業新聞東北支所長賞を受賞した菊池苺さん（奥州市立木細工小学校五年）の「つなげていきたい米づくり」は、地域の人たちや自然との温かい関わりを、人物の様子や情景が目につくかぶ生き生きとした表現で綴った優れた作品です。

優秀賞を受賞した菊池由佳莉さん（奥州市立木細工小学校二年）の「おにぎりやさんになりたいな」は、作ったおにぎりを「おいしい」と言ってもらえるまでの気持ちの高まりが、読み手にも伝わってくる素直な表現に好感がもてます。

同じく優秀賞を受賞した熊谷太志さん（一関市立花泉中学校二年）の「ご飯と家族の食卓」は、祖母の作る「炊き込みご飯」への思いと、家族の団欒に対する考えを、畳みかける短文で力強く訴えかけてくる個性的な作品です。

学校奨励賞は、二戸市立金田一中学校です。全学年で継続的に取り組み、応募作品数が多いこと、個性的で優れた作品が多いことが高く評価されました。

入賞作品は勿論のこと、応募された多くの作品から、日本の主食であるお米への感謝の気持ち、温かな家族への愛情、そして、稲作を大事に継承する郷土への愛着がよく伝わってきました。今後、多くの子どもたちが主体的に「ごはん・お米」に関する様々な体験を行い、表現する機会を大切にしていただくことを期待して、講評といたします。

【全国コンクール】

◆優秀賞

千葉 心 遙	一関市立滝沢小学校	3年	「お米を流さないように…はじめてのお米とき」
及川 小春	一関市立興田中学校	2年	「母の笑顔とちらし寿司」

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

千葉 心 遙	一関市立滝沢小学校	3年	「お米を流さないように…はじめてのお米とき」
--------	-----------	----	------------------------

◆岩手県教育長賞

及川 小春	一関市立興田中学校	2年	「母の笑顔とちらし寿司」
-------	-----------	----	--------------

◆JA岩手県五連会長賞

佐藤 瑞実	一関市立興田中学校	2年	「バケツ稲の観察」
-------	-----------	----	-----------

◆一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞

松本 匠生	九戸村立江刺家小学校	2年	「3時のおやつ」
-------	------------	----	----------

◆株式会社日本農業新聞東北支所長賞

夏井 二湖	北上市立江釣子小学校	5年	「米づくりって大変だ！」
-------	------------	----	--------------

◆優秀賞

佐藤 日菜子	盛岡市立見前中学校	2年	「愛情こめて」
河村 陽和	九戸村立江刺家小学校	3年	「がんばったあとのおにぎり、最高！」

◆学校奨励賞

岩手県立前沢明峰支援学校中学部

◆佳作

【1部】

細川 奈吾	江刺家小	2年	「おじいちゃんのおにぎり」	伊藤 仁沙	黒沢尻北小	4年	「お米できたよ」
小枝 愛和	江刺家小	3年	「おにぎり大すき！」	齋藤 紗愛	湯口小	5年	「お米大好き」
久保田愛理	矢沢小	1年	「私とごはん」	鷹木 遥那	江釣子小	4年	「田うえはむずかしい」
佐藤琥太郎	宮野目小	3年	「つまみぐい」				
千葉 紗也	舞川小	2年	「おいしいおにぎり」	坂井 瑞希	下橋中	2年	「私の思い出」
平沢 慶佳	一関小	1年	「大きいおにぎり」	吉田 広美	見前中	1年	「一口一口味わって」
			いただきます	小田島佳穂	見前中	2年	「思いでの田んぼ」
				松永 夏南	一関一高附属中	2年	「一粒ずつの思い出」

【2部】

宮川 空	江刺家小	4年	「特大おにぎり朝ごはん」	千金楽 智	前沢明峰支援学校中学部	2年	「宿泊学習でおいしいごはん」
七戸友利乃	江刺家小	4年	「ほかほかごはん」				
			いただきます				
高坂 結衣	黒沢尻北小	5年	「おいしいごはん」				
大友 楓	江釣子小	4年	「みんなで稲かり」				
鈴木 来夢	真城小	5年	「ぼくと、おいしいお米」				

【全国コンクール】

◆優秀賞

平岩 優心 紫波町立赤石小学校 3年 「おいわいのきりたんぼ」

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

平岩 優心 紫波町立赤石小学校 3年 「おいわいのきりたんぼ」

◆岩手県教育長賞

中 寫 歩 一戸町立奥中山中学校 2年 「大地からの贈り物」

◆JA岩手県五連会長賞

菊池 美桜 奥州市立木細工小学校 5年 「い手の田んぼのお手伝い」

◆一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞

佐々木 亮輔 宮古市立津軽石中学校 1年 「祖父と米作り」

◆株式会社日本農業新聞東北支所長賞

菊池 苺 奥州市立木細工小学校 5年 「つなげていきたい米作り」

◆優秀賞

菊池 由佳莉 奥州市立木細工小学校 2年 「おにぎりやさんになりたいな」

熊谷 太志 一関市立花泉中学校 2年 「ご飯と家族の食卓」

◆学校奨励賞

二戸市立金田一中学校

◆佳作

【1部】

奥寺 彩乃 小久慈小 3年 「じいちゃんがつくるお米」

芦萱 陽菜 舞川小 3年 「心をこめて作ったごはん」

菊池 結心 木細工小 1年 「おにぎりをもって、
ぴくにつく」

【2部】

菊池 智果 木細工小 5年 「大切なお米」

菊池 優花 木細工小 5年 「もち米ごはん」

沢田 萌歌 花輪小 6年 「小学校生活最後の田植え」

菊池 怜史 木細工小 6年 「小学校生活最後の田植え」

玉澤歩風乃 藤沢小 4年 「ほかほかごはん、
いただきます。」

【3部】

菊池 望夢 木細工小 6年 「料理教室」

菊池紗央理 木細工小 5年 「いろんなお米」

久保田 蓮 金田一中 2年 「お米とわたし」

駒ヶ嶺 梓 金田一中 3年 「ごはん・お米とわたし」

因幡 祐志 川井中 1年 「ご飯を残さず食べたい」

氏家 りこ 花泉中 2年 「もちと生きる」

田村 美夏 小本中 3年 「お米のありがたみ」

叶城 優奈 山形中 3年 「輝く努力の結晶『米』」

高橋 莞 金田一中 2年 「米と日本とそれから私」

第44回「ごはん・お米とわたし」 作文・図画岩手県コンクールの概要

応募点数

学 校	作 文	図 画	合 計
小学校	16	166	182
中学校	62	32	94
計	78	198	276

応募締切日

令和元年9月6日

県コンクール第1次審査会

令和元年10月1日（全国コンクールへの推薦作品を決定）

県コンクール第2次審査会

令和元年12月10日

表彰式

令和2年1月29日 ホテルメトロポリタン本館 4階「岩手の間」

主催

岩手県内J A・J A岩手県中央会

後援

岩手県（農林水産部県産米戦略室）

岩手県教育委員会・いわて純情米需要拡大推進協議会

一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局・株式会社日本農業新聞東北支所

J A岩手県信連・J A岩手県厚生連・J A全農いわて・J A共済連岩手

審査員（敬称略）

審査委員長	八重樫	勝	元岩手県教育委員会教育委員長
専門審査委員	佐々木	俊江	盛岡市立下橋中学校 指導教諭
専門審査委員	山下	るり子	盛岡市教育委員会学校教育課指導主事
審査委員	平間	聡	（一社）家の光協会北海道東北普及文化局局长
審査委員	堀越	智子	（株）日本農業新聞東北支所支所長
審査委員	小原	繁	岩手県農林水産部県産米戦略室県産米戦略監
審査委員	鈴木	邦彦	J A岩手県信連代表理事専務
審査委員	橘	幸広	J A岩手県厚生連常務理事
審査委員	松田	功	J A全農いわて米穀部部長
審査委員	菊池	秀峰	J A共済連岩手県副本部長
審査委員	阿部	勝昭	J A岩手県中央会副会長理事

※このコンクールに対するご意見・ご感想をお待ちしております。

JA岩手県中央会 JA支援部[組織広報班] 〒020-0022 盛岡市大通一丁目2番1号 TEL019-626-8519
ホームページ<http://www.ja-iwate.or.jp/> Eメールアドレス kouhou@jaiwate.or.jp